

震災後に 芽生えたもの II

「わせねでや」

震災直後、桂島の避難所で生まれた一遍の詩がありました。
島への思いが込められた、その詩のタイトルは「わせねでや」。
ここで生まれ育った内海和江さんが、
島を離れていく人々に贈る言葉として綴ったものでした。



内海 和江さん



© TBC

「津波で家がやられて、島を出ることになった人たちに、みんな頑張つてね、また帰ってきてよ」という気持ちを込めたの。本当は声に出して伝えなかったんだけど、あの頃、震災のショックで10日間ほど声を出せなかったのね。」

それまで内海さんは、詩を書いた経験がまったくなかったそうですが、突然頭の中に聞こえてきた「書きなさい、書きなさい」という声に突き動かされるままに、春の菜の花、夏のハマナス、秋の萩など、思い起こされてきた島のさまざまな風景をひたすらに綴ったそうです。その様子は、東北放送で放送されている朝の情報番組『ウオッチン! みやぎ』で取り上げられました。

そして、この番組を見て東北放送に連絡を取ったのが、在仙のロックバンド、元ザ・キャプテンズのヒザシさん。「この美しい詩を後世に残したい」との思いから詩に曲をつけて形にしたいと強く感じました。そこで『ウオッチン! みやぎ』の番組スタッフが中心となって『桂島』というプロジェクトを発足。

その後、内海さんが大ファンである



平成24年7月、ボーカルの加藤登紀子さんと作曲・ギター担当のミュージシャン ヒザシさんが塩竈市役所を訪れ、佐藤塩竈市長と桂島の皆さん（代表：内海栄蔵さん・鈴木卓朗さん）へとCDが贈呈されました。併せて、加藤さん直筆の「わせねでや」の書も市長にプレゼントされました

平成25年、浦戸諸島を訪れたお客様（ご希望の方）にプレゼントされた塩竈市営汽船乗船記念券「希望の葉」。各島ごと5色あり（各島の形がプリントされています）、裏面には「わせねでや」の歌詞の一節が季節ごとに添えられています



という加藤登紀子さんをはじめ、熊谷育美さん、閃雷さんといった一流ミュージシャンの協力でレコーディングが行われ、平成24年7月11日に待望のCDがリリース

スされました。

わせねでや——それは宮城県の方言で「忘れないでね」という意味。私も覚えていたからね」との親しさが込められた言葉でもあります。そのタイトルにふさわしく、「100年後もその先も歌い継がれるように」という祈りが込められています。プロジェクトは、CDの発売を機に、桂島や東北放送主催のイベントでのライブなどにつながり、やがては宮城県警察音楽隊が復興イベントで吹奏楽バージョンを演奏したり、仙台南高校合唱部の皆さんが桂島を訪れて内海さんの前で歌声を披露したりと、大きな広がりを見せています。

現在は「わせねでやプロジェクト」と名称を変え、平成26年には桂島の海水浴場再開の費用としてCDの収益から50万円を塩竈市に義援金として寄贈しました。プロジェクトメンバーである東北放送のスタッフの皆さんは、「わせねでや」への思いを次のように語ります。

平成25年7月に開催されたTBC夏まつり2013では、勾当台公園市民広場を会場にして、加藤登紀子withみちの空、仙台南高校の合唱団の皆さんが「わせねでや」を大合唱、大トリとして披露されステージ上はもちろん観客席の皆さんも一体となって、大いに盛り上がりを見せました



「多くの方がこの曲に共感していただけるのは、被災地の現状、ふるさとや仲間の大切ななどが込められているからでしょう。被災地の、小さな島のことを忘れて見捨ててしまわないで」という意味に加えて、元から島に縁のあった人、震災がきっかけで縁ができた人に、また来てよ。（私も）忘れずに（覚えて・記憶して）いるからね」という温かな呼び掛けでもあるんです。私たちはこの歌を広める活動とともに、忘れてはならない場所・人・活動を伝えるプロジェクトとして展開していきたいと考えています。」

また、こうした動きを受けて、「本当に

びつくりして、戸惑いを感じる日々の」と語るのは内海さん。
「人生には、上り坂と下り坂のほかに、まさか、の坂があるの。父親は塩釜港と桂島を結ぶ巡航船の礎を築いた人。それが今、塩釜港から出る巡航船では娘の私が携わった「わせねでや」が流れているのって、本当に不思議な縁でしょう。」
内海さんは、今も詩を綴り続けているそうです。今後は、平成29年頃を目標に浦戸諸島をテーマにした詩を書きあげること。その実現のためにも「元気にがんばりたい」と語ってくれました。



被災後、一度は畳もうと思ったお店は、ボランティアの方々の励ましもあって、島のコンビニ「わせねでや」として再開。ご主人の輝男さんと二人三脚で営業を続ける。「桂島を訪れたお客様の休息の場にしてほしいのね」